論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　王　静

論　文　題　目

村上春樹文学における 20 世紀後半の理想主義への応答――全共闘運動・コミューン・宗教性の相対化から信仰の再構築へ

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	飯田　祐子
委員	名古屋大学准教授	日比　嘉高
委員	名古屋大学教授	中村　靖子
委員	専修大学教授	米村　みゆき

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

〔本論文の概要〕

本論文は三部構成であり、序章と終章のほか九章で構成されている。第一部（第一～四章）で二十世紀後半の理想主義と村上作品の関わりを検討し、第二部（第五・六章）で記憶、歴史の描き方に着目してオウム真理教事件前の個人の深層意識の捉え方を検討し、第三部（第七～九章）で、オウム真理教事件後の内面に向かう理想主義の意味を論じている。各章を貫くのは、深層意識に対する村上春樹の関心の深まりという視点であり、初期から後期に至る村上作品の連続性を明らかにするとともに、村上作品における理想主義への応答の軌跡を記述している。

第一部では通時的に村上文学と六十年代末、七十年代、八十年代の理想主義との関わりを論じている。 六十年代の理想主義の状況を表象する『１９７３年のピンボール』、七十年代のコミューンを描く『ノルウェイの森』、八十年代のスピリチュアリティの聖地についての巡礼記「アトス――神様のリアル・ワールド」、さらに七十年代と八十年代をつなぐ理想主義的実践としてコミューンとそこにおけるスピリチュアリズムを批判的に描いた『１Ｑ８４』を取り上げ、それぞれの時代の理想主義的な社会実践がいかに作品内に組み込まれているかを検討している。現実のコミューンの実践例を調査し、作品に描かれた共同体との重なりと虚構性を詳細に検討した。

第二部では記憶・歴史のテーマについて論じている。第三部で検討する深層意識への志向の前段として位置づけ、『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』ではディストピアからの脱出の契機に記憶が置かれ、『ねじまき鳥クロニクル』では歴史修正主義に抵抗するものとして記憶の内面的な実在性が描かれていることを論じる。深層意識の構成において記憶の働きが重要視されていることを明らかにした。

第三部では、近年の作品を対象として、深層意識を経由して新たな理想主義(信仰・連帯)が模索されていることを明らかにする。「神の子どもたちはみな踊る」『１Ｑ８４』『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』における宗教心理学との関わりについて検討し、多元的な宇宙論に接続しつつ、新たな理想主義として宗教性を超える心理的な信仰が提示されていることを指摘している。

以上の分析によって、村上春樹文学による二十世紀後半の理想主義への応答の変遷を明らかにするとともに、村上春樹が提示する現代における理想主義の独自性および思想的な根源を明らかにした。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

〔本論文の評価〕

村上春樹は現代作家の中では突出して研究の多い作家であるが、本研究は先行研究を周到に博覧した上で、村上春樹の「理想主義」というほとんど論じられてこなかった問題に取り組んだもので、第一にその着眼点を評価することができる。村上春樹は、日本のみならずアジアや欧米においても、都市文化を象徴する現代作家として受容されてきたが、一九九五年以後は、作家自身がデタッチメントからコミットメントへと方向転換を公言し、倫理についての発言を重ねている。本研究は、そのような現在の村上春樹の姿勢がどのように形成されてきたかを、初期の作品から順に検討し、一九九五年以前と以後の連続性を浮かび上がらせるとともに、村上春樹の作品群を時代の中に置き、六〇年代から現在に至る理想主義的な社会実践に対して、全共闘世代の一人として継続的な応答がなされてきたことを明らかにした。

本研究の最も大きな意義は、作品内の要素が現実の理想主義的社会実践とどのような関連をもつかを、実証的に検討した点にある。とくに、コミューンについては、実際の事例について細かく調査し、作品に描かれた共同体のモデルに近い事例を示すとともに、作品に示された独自性を具体的に明らかにした。従来の村上春樹研究においては、作品内の諸要素がいかにイメージとして記号化されているかに関心が集中してきたため、実証的な研究はほとんどなされてこなかった。本論文での検証は、そのような研究の空白を補うだけでなく、注釈的なモデル論を越えて、理想主義に対する村上春樹の継続的な関心を浮かび上がらせた点で高く評価された。また、近年の村上春樹作品において深層意識に向かう理想主義が信仰の再構築として提示されていることを、宗教心理学の諸理論への接近から論じ、村上春樹の思想的特徴の読解に新たな視点を加えたことも評価に値する。

一方、問題点としては、論中に使用された鍵語の定義に曖昧さがみられること、共同体に注目したために個人についての考察が不十分になっていること、考察が村上春樹自身の説明の枠内に収まっており相対化が不十分であることなどが、審査委員より指摘された。

しかしながらそれらの問題点は、今後の課題となるものであり、決して本論文の成果の価値を損なうものではない。以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。